

京まち工房



WINTER
情報交流誌

no.

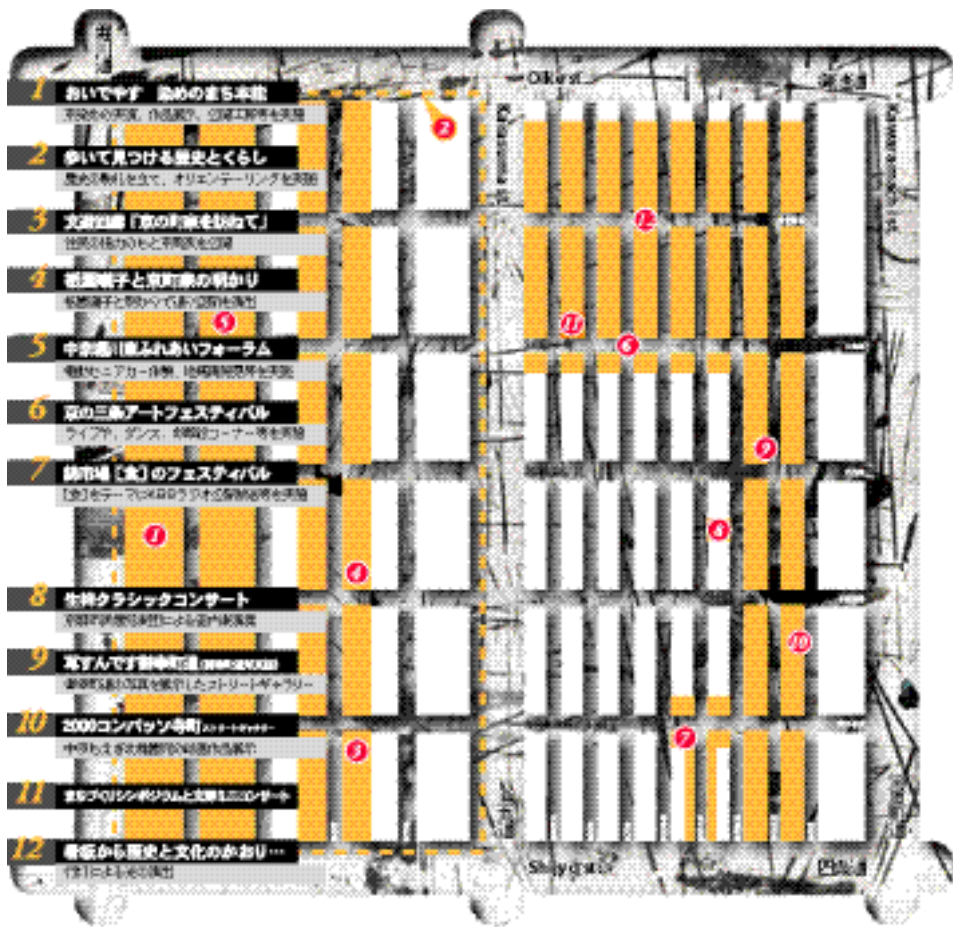
13

(財)京都市景観・まちづくりセンター ニュースレター

パートナーシップで進めるまちづくり

歩いて暮らせる街づくり 京都・まちなか再発見

まちなかを歩く日



平成12年11月17日(金)~19日(日)に、パートナーシップによる都心再生に向けた社会実験として「まちなかを歩く日」が実施されました。この取組は、多くの市民や観光客に歩いて京都のまちなかに触れていただき、まちを再発見すると同時に、まちなかを歩くことの楽しさとまちづくりへの効果を明らかにすることを目的としており、様々な成果が得られました。

とりわけ、この取組が、その趣旨に賛同された多くの個人や団体が構成された「歩いて暮らせる街づくり推進会議」により手作りで実施され、担い手としての市民の力が存分に示されたことは特筆されます。

日頃の立場や仕事の違いを超えて、京都のまちなかが好き、京都のまちづくりに役立ちたいという気持ちで協働し、多くの取組が短時間の間に企画され実践されました。地域資源の発見と共有が生まれ、この間、新たな人と人の交流が生まれ、発信がなされました。これらは、参加された市民の一人一人が、私たちがまちを担っていく主人公であるという強い意思から生まれたものです。行政が投げ掛けたテーマを契機に実に多くの活動が生まれ、エネルギーが蓄積されました。

こうした市民の力と無限の可能性を信じ、市民と行政がより良いパートナーとしての歩みを加速していくことが「まちなかを歩く日」の最大の成果であることが実感されました。

歩いて暮らせる街づくり推進会議

平成12年7月29日設立。「歩いて暮らせる街づくり」のあり方を検討するため、京都市の呼び掛けに応じて集まった団体や個人で構成。自治連合会、地域のまちづくり活動やマンション問題に取り組む団体、商店街振興組合、地域の企業などと、福祉や環境問題、まちづくりなどに関わる市民団体や、建築関係の専門家、学識経験者、京都のまちづくりに関心の高い市民等約150名が参加。

坂本 美江子さん

中京区城巽学区住民、歩いて見つける歴史とくらし「まちなかオリエンテーリング」を担当



中京区視覚障害者支援グループ「らく」代表者、京都オリエンテーリングクラブ会員。

日頃の活動では絶対に接点のない、専門家や、学識経験者、地域の方々や、若い人も知り合うことができたことが大変嬉しいです。また、それぞれの方が色々なことをご存知で、個々の歴史をお持ちでられることには驚かされました。

また、駒札づくり(数十箇所)を通じて、地域の文化や歴史を見直し、その奥の深さを再認識しました。今後は、出会った方々とのつながりや経験を大切に、視覚障害者が安心して歩けるまちづくりへ向けた取組を行っていきたくと思っています。

居戸 節二さん

中京区日影学区住民、「京の三条アートフェスティバル」を担当



京の三条まちづくり協議会事務局。

三条通の道路整備のうち、寺町通~烏丸通間が完成したときにちょうど、今回のお話があり、この機会にぜひ歩行者天国をということで、取り組むこととなりました。

多様なパフォーマンスの出演者26組(内16組は、外国の方)を集めていただいた森本さんを始めとする地域住民やボランティアの方々との協力が何よりも力となりました。

以前から、線だけでなく面としてまちの活性化を考えていた中で、姉小路界隈や、錦市場と連携が取れたことに意義があり、今後、今回生まれた人脈を活かした取組が行われることを、行政に期待します。

橘 恵利子さん

北区住民、情報提供マップづくり部会



まちなかの町家活用店舗の散策マップを作成した関係で、今回参加しました。ひざを交えてお話しする機会がなかった地元の方々とワークショップにも参加させていただき、充実した気持ちで「まちなか遊歩案内2000」のマップづくりもできました。市民が自らの意思を持って動き出すことが何よりまちづくりに影響するものであること、また、そうでなければまちづくりが始まらないことを再確認しました。

今回の取組は、様々な立場の人々が集まったことで、相乗効果を生み、また裏方で関わっている多くの人のつながりと協力があつたからこそ実現できたように思います。

この取組が、街中だけでなく、市全体の動きにつながることを望んでいます。

あなたのまちづくり拝見

「右京の里」のまちづくり

住民主体のまちづくりを様々な視点から紹介するこのコーナー。今回は、まちのいいところを守り発展させるため、足かけ3年にわたる取組を経て、まちづくりのルールとして、約270世帯もの方々が建築協定を結んだ「右京の里」の取組を紹介します。

「右京の里」

「右京の里」は、洛西ニュータウンの南側に位置し、昭和40年に阪急電鉄により開発された周辺には善峰川と小畑川が流れ、田畑が広がる、約900戸の戸建住宅団地です。



緑に包まれた低層住宅の町並み

ルールづくりのきっかけ

開発から、30年以上を経て、世帯主の高齢化や、世代交代、社会状況の変化などの影響を受け、まちの様子は少しずつ変化してきました。

平成8年、こうした変化を一層加速する転機が訪れます。下水道の整備により一区画一戸の汚水排水口の制限が消え、従来の区画が2分割、3分割されるようになりました。

生活の原風景にもなっていた馴染みのあるまちの姿の変化に対して、住民の中に、何らかのルールづくりの必要性が高まってきます。平成10年、4町内の自治会で作る自治協議会の町内会長と協議会会長の5人のリーダーの気持が一つとなったことが、取組のきっかけとなりました。

建築協定を地域の人のものとするための取組

様々な人からのアドバイスや、論議を積み重ね、まちづくりのルールとして建築協定を活用する方向が固まり、自治協議会の中に、平成10年10月に建築協定準備委員会が発足しました。専門的な支えは、一級建築士の山岸雄次郎氏ら地域住民でもある専門家が会を支えます。

「ルールづくりにこだわりすぎて町内の仲が悪くならないこと、ルールの基本は他人に迷惑をかけること、また、一人でも多くの人に合意してもらうことを第一に考えました」と小沢力夫氏(建築協定準備委員会委員)は振り返ります。

第一回の説明会は、平成10年11月、「専門的な言葉は使わずできる限り分かりやすく」建築協定の趣旨や、これまでのいきさつについて話し合いました。

12月には、まちの将来像に関してアンケートを実施し、「西山の山並みや周辺の自然環境にとけこむまちで、「敷地内のゆとり」に配慮した住まいを維持していきたい」と考えている人が多いことが確認されました。



アンケート結果をお知らせしたニュース

アンケート結果や疑問点の回答などについては、ニュースや平日の説明会を開催し、周知を図ります。

平成11年2月には、協定の具体化についてのアンケートを実施するとともに、疑問点や建築の専門的な内容に関する相談会を4日間にわたり開催しました。

その後も、説明会やアンケート、ニュースの発行などが積み重ねられ、平成11年11月に、「北側隣地まで1階は1m以上、2階は2m以上を空ける」「軒高を6.5mに制限する」ことなどを盛り込んだ協定案が作成されました。

12月から、合意形成の手続きに取り組み、平成12年1月に、市内最大規模の約270世帯による建築協定認可申請書を市に提出し、5月に認可されました。

認可後は、建築協定の規定に基づき設置された運営委員会が、建築物の工事等についての事前同意等を行うことにより、建築協定の円滑な運営に務めています。

「準備委員会24回、説明会4度(延べ11日)、アンケート3回、ニュース発行11号、それを支えた多くの住民の方々の協力の賜物です」と建築協定準備委員会委員であった小沢力夫氏や川勝治夫氏は感慨深げに語ります。

他人に迷惑をかけないために、自らに制限を加える

違いに目を向けるのではなく、共通する地域への思いを大切にされた準備委員会の気配りのゆき届いた粘り強い取組と、その訴えかけに真摯に答えたまちを大切に思う人々の願いが、実現の原動力となりました。

こうした取組を通じて得られた住民相互の信頼と交流は、これからのまちづくりの推進力になります。

制度に関する専門的な内容の理解や、各種申請手続きの迅速化等に協力した行政や地域の内外の専門家との息の合ったパートナーシップも忘れてはなりません。

まちづくりルールの共有を一人でも多くの人に

平成12年10月8日の運営委員会では、更に建築協定の取組を進めていくため、運営委員会ニュースを全戸配布していくことが確認されました。

こうした取組により、移り住む時に抱いた思いを、新しい世代に受け継いでいきます。また、新たに住民となった人ともまちづくりのルールとして共有することを通じて、人と人の輪が広がり、より豊かな地域が形成されていくことが期待されます。

建築協定

住民自らが建築物の敷地や、位置、用途や形態などについて設けるルールであり、建築基準法に上乗せされ、所有権の移転の際も効果は継承される。

小沢力夫 さん

平成10年度右京の里自治協議会会長
建築協定準備委員会委員
建築協定合意者代表

近所の人に迷惑をかけないことを基本に、地域の人間関係に心配りをして進めてきました。途中のアンケートでの60～70%の賛成の数字より、合意者の割合が少なかったことは少し残念です。

気持ちは持っていますが様々な理由から、参加していない人もいると思うので、今後もそれぞれの人の思いに耳を傾け、少しでも参加者を増やしていきたいと思っています。

川勝治夫 さん

平成9、10年度右京の里自治協議会副会長
建築協定準備委員会委員
建築協定運営委員会委員長

自治協議会会長と4町内会長の5人の足並みが揃ったことが最も大きな力になったと思います。

分かっただけで努力した結果、多くの時間がかかりました。

住民が一番気にしていたことは、自分自身を束縛することだったと思います。

締結まで役員一同走ってきたので、少し休んでいましたが、今後は、さらに参加者を増やす活動を行っていくつもりです。

浅井 勝 さん

平成12年度右京の里自治協議会会長

今年度の自治会の重要課題として、建築協定については位置付けています。

私の方にも時々、協定内容についての質問がありますが、参加されていない方の中には、制限の内容や、資産価値への影響、制度がもたらす将来像など、なんとなく不安に思われている方もおられるようにも思います。

環境を守りたいという気持ちをお持ちの方も多いと思いますので、今後、講習会や説明会を開催し、参加者を増やしていきたいと思っています。

お知恵拝借～

近江八幡のまちづくり

今回は琵琶湖の湖東のほぼ中央に位置する近江八幡で行われている八幡堀の復活を契機としたまちづくりからお知恵を拝借します。

かつての城下町と近江商人の発祥のまち 近江八幡

近江八幡は、天正13年、豊臣秀次により築かれた城を中心に発展したまちで、当時の碁盤目状の町並みを残していると同時に、格子や虫籠窓からなる間口の広いつし2階(1)と道路沿いの庭に配する見越しの松が特徴の町家が今も数多く存在しています。また、秀次が防護機能と湖上交通による物資流通機能を併せ持った八幡堀を開削したことにより、後には商人のまちとして栄え、数多くの近江商人を生み出したまちとしても全国に知れ渡っています。



近江八幡の町並み(伝統的建造物群保存地区)

八幡堀の復活から始まったまちづくり

その近江八幡のシンボルである八幡堀も、流通の大動脈としての機能をモータリゼーションという時代の流れとともに失い、悲しいことにその美しい姿はドブ川へと変わっていきました。悪臭や大量の虫の発生など様々な被害から、なんとかしてほしいという地元住民の要望により県は堀の埋め立てを進めようとしていました。しかし、「単なる公害問題として考えて良いのか。より良い方向で改修するため、文化遺産としてだけではなく、都市成立の基盤として考える必要があるのではないか」と昭和44年、住民が立ち上がったことを契機に近江八幡のまちづくりが始まりました。この発想の転換がその後の近江八幡のまちづくりを大きく変えることになったのです。

当初は近江八幡青年会議所が中心となり、「堀は埋め立てた時から後悔が始まる」を合言葉に全面浚渫(2)と復元に向けての呼び掛けや様々な提案、八幡堀の自主清掃活動等を行っていました。その後、そういった活動を契機に「よみがえる近江八幡を考える会」が結成され、市民ぐるみの活動へと広がっていききました。

その結果、昭和48年に県は予算を返上し、かつての八幡堀の復活に向けて全面浚渫工事が着工され、粘り強い住民活動の甲斐あって、八幡堀は見事に甦ったのでした。



再生された八幡堀

その後、八幡堀沿いの土蔵を改造し、茶寮を共同経営でオープンさせた市内の主婦5名のつばやきを契機として、八幡堀のしょうぶの花を甦らせようと昭和62年に「八幡堀しょうぶの会」が結成され、またその会の発展形として昭和63年に「八幡堀を守る会」が結成される等、八幡堀を守る市民の活動は更なる発展を見せました。また、市民と市とが共に投資し、市民によるまちづくり活動を支援しようと平成8年に「ハートランド推進財団」が設立されるまでになりました。かつて地元八幡商人が資金を出し合い小学校を建てたという高い自治意識が今日まで脈々と受け継がれているようです。

更に、八幡堀の復活から始まったまちづくり活動は、様々な方向へと広がりをを見せています。昭和54年に行った国鉄(現JR)の近江八幡駅舎の改築にあたってのデザインの検討や、昭和63年の八幡堀周辺の伝統的建造物群保存地区指定による町並みの保存等、町並みまちづくり活動への広がりがその一つに揚げられます。また、最近では「いいまちをつくる懇談会」「美しい湖国を守る会」の結成や、キリスト教伝道師として来日し、「建築の風格は人間の人格と同じく、その外見よりもむしろ内容にある」としたヒューマニズムあふれる数々の名

建築を生み出したヴォーリズの建築保存再生運動を行う特定非営利活動法人「一粒の会」が結成される等、活動の広がりが見られます。

「八幡堀を守る会」

様々な活動団体の一つとして先にも紹介した「八幡堀を守る会」は、昭和62年、市民の誇りとする八幡堀周辺の景観保全と美化活動を通じ、住民の郷土愛と情操向上を図ることを目的に結成された有志の会です。現在の会員数は約300名。今では八幡堀周辺の住民の方々だけでなく、近江八幡市民全体の参加へと広がっています。月に1度の美化活動は現在でも継続されているほか、他のまちづくり活動組織との交流、若い世代へこれらの活動の精神を引き継ごうと歴史を語る会やたそがれコンサート等のイベントを開催する等、様々な活動が行われています。前述の土蔵を改造した茶寮の共同経営者の1人で同会の事務局でもある西村恵美子さんは、近江八幡での30年の活動を振り返り、「八幡堀が荒れ果てたということは、自分たちのまちを愛する意識の弱さの表れで、恥ずかしいことではあるけれども、その事実があったからこそ、郷土愛や連帯感が生まれ、強まりました。そして、長年掛けてコツコツとやってきたことがより多くの人の思いを一つにすることへとつながりました。今後は、様々な組織と上手くネットワークを組みながら、若い人にこれらの活動の精神を引き継いでいけるよう、そして、自分たち住民が住み良く、このまちに誇りを持ってよう、まちづくりを進めていきたいと思います。それによって、様々な人が集まり、様々な広がりが出てくると信じています」とおっしゃっていました。



八幡堀の自主清掃

近江八幡には、碁盤目状の町並みや住民が設立した小学校等にも見られる自治意識の高さ等、京都にも見られるまちづくりの文化が今も引き継がれていることが感じられます。今後も急ぐことなく、多くの市民の理解を得ながら一歩一歩着実に進められるこのまちづくり活動に多くの期待が寄せられます。

- 1 つし2階: 中2階。2階の天井が低い部分を「つし」と呼んでいる。
- 2 浚渫(しゅんせつ): 水底の土などをさらい、深くすること。

京のまちの今昔物語



昭和30年頃の三条通、堺町辺りから西向きに撮影。
当時は祇園祭の後祭りとして7月24日に、三条通を山が巡行していたそうです。

写真は中京区にお住まいの居戸節二さんからいただきました。

「京のまちの今昔物語」では皆さんがお持ちの昔の写真を切り口にして、現在の京都の問題点を再確認できたらと思います。
皆さんもお宅のアルバムの古い写真を探し出してぜひ投稿してください。

「まちなか住まい交流会」

「顔の見える安心感」と「新しいまちづくりの担い手」を得る仕組みづくりを目指して

住民相互のコミュニケーションは、地域の資源を共有し、共にまちづくりを進めていくためには、欠かせないものとなっています。京都の都心部では、集合住宅居住者をはじめ新たに入居する住民とその地域に長く住まう人とのコミュニケーションが課題となっている地域が少なくありません。

地域住民と地権者が協働で土地利用を考える「地域共生の土地利用検討会」(ニュースレター7、10、11号参照)では、こうした住民間の



まちなか住まい交流会の様子

コミュニケーションの促進、新しいまちづくりの担い手の確保、そして交流促進につながる仕組み・仕掛けを考えることを目的として「まちなか住まい交流会」を開催しました。

9月3日(日)に開催したまちなか住まい交流会の参加者は、事前に募集し、これに応募された約20名の方、そして地域共生の土地利用検討会のメンバーをはじめとする周辺にお住まいの方です。応募された方は、まちなかに住まいを探しておられる方、自身のライフスタイルを実現するための住まいを探してお

れる方、まちづくりに関心のある学生さんまで老若男女、多岐に渡ります。

まちなか住まい交流会では、検討会のメンバーとして、検討地(柳馬場三条上)周辺で活発なまちづくり活動を展開されている「姉小路界隈を考える会」の活動をビデオや写真を交えて紹介。そしてなぜまちなかに住みたいのか、まちなか住まいの利点、課題などについて率直に自分の思いを出し合いながらも和気あいあいと話が展開されました。しきたりや暗黙のルール等に関する不安などについて、周辺にお住まいの方からアドバイスなどを頂くなど、普段なかなか話す機会がない内容にまで及びました。住民間のコミュニケーションで課題となる「お互いに顔の見える関係」づくりに向けたお互いの思いを共有することができました。

次のステップとして、まちなか住まいをより具体的にイメージするため、応募者を対象に今の暮らし方、10年後の暮らし方に関するアンケートを行い、これを基に10月22日(日)にまちなか住まい交流会ワークショップを開催しました。

ワークショップでは、それぞれのまちなか住まいに対する思いを出し合いました。住民間のコミュニケーションのためには「こんな風に暮らしたい」「地域ではこのように住んで欲しい」というそれぞれの思いを理解し合うことが大切で、「これを踏まえて双方の歩み寄りが必要」加えて例えば「集合住宅においてもそれぞれの交流を促進するような仕掛けが必



ワークショップの様子

要だ」という意見・アイデア等が出ました。具体的には「お地藏さんを祀り地域の人と一緒に世話をする」「ギャラリーを設け地域の人と一緒に展示し、住民及び地域の情報発信をする」というものでした。

今後の住まい選びの基準として、従来のような「利便性」「間取り」だけでなく、住み手のライフスタイルに合わせる「可変性」や、この地域だから住みたいんだ、という「地域性」など選択基準が広がるのが予想されています。

そして、その地域でいきいきと暮らすためには、住民相互で「顔の见えない不安感」を「顔の見える安心感」とし、地域の歴史や資源を共有し、誇りと愛着を抱きながら、共にまちづくりの担い手としてまちの将来を創り上げていく。このようなまちづくりに向けた第一歩として、今回のような交流会の一連の取組が果たす役割は大きいと思われます。なお、まちなか住まい交流会及びワークショップの成果は、検討地の土地利用の計画に反映させていくこととなります。

神戸・京都

2000年目のまち 1200年目のまち

フォトパネル展示会+スライド上映会

本企画は、センターと「プランナーズネットワーク神戸(1)」、「まちづくりネットワーク京都(2)」の共催で、神戸と現在の京都の比較を通じて、神戸の現況を知ること、そして、京都の持つ特性と資源の発見、その活用のあり方について一つの話提供をすることを目指して開催されました。

「神戸、京都いずれも学べるような企画に」と検討を重ね、京都の専門家等と合同で京都西陣地域北部を中心に写真撮影を行い、これらをパネル化しました。また神戸・京都の共通点及び相違点を見いだすことを目的に、撮影した写真を用いて神戸・京都共同のスライド上映会・意見交換会を行いました(フォトパネル展:10月20(金)~27(金)、スライド上映会:10月21(土)、27(金)、いずれもセンター会議室にて開催)。

パネル展へは約60人、スライド上映会へは2回の上映会あわせて約40人の方にご参加いただきました。

意見交換の場では「両都市とも家の前を鉢植えなど緑や小物で飾る傾向がある。積極的にまちなみを創ろうという意識の表れでは」「家の前を鉢植え等で飾るのは、路上駐車を防ぐための切実な思いが現れた行為でもある」「家の前を飾る緑はコミュニティの状態を映し出しているのでは」など、様々な立場の方が参加していたこともあり、緑一つについても、立場が変わると視点も変わり、多角的な視点からの意見交換が展開されました。

都市型社会を迎えつつある今日のまちづくりでは、地域住民による主体的な取組を基礎として、それぞれの地域の人や文化など多様な資源を活かすことにより、活力ある魅力的な地域を創造・再生していくことが課題となっています。この課題に応えるためには、地域住民やまちづくりを支援

する専門家等が客観的な地域資源の発見と共有に取り組みでいくことが重要であると考えられています。

まちづくりにおける専門家の関わりが模索されている中、こうした企画が地域住民と専門家でお互いに学びあう場として展開されていくことが期待されます。

1 プランナーズネットワーク神戸

阪神・淡路大震災を契機として、復興まちづくりに関わる多くのコンサルタント等の内、若手を中心とする横の連絡組織として設立された任意団体。激甚被災地区の復興を記録することにより、現代の既成市街地の現状と将来に向けての課題を明らかにしていくことを目的として1998年に設立されました。

これまで、東灘区を中心とする悉皆調査により約3千枚の写真撮影、パネル化し、平成12年から東京をはじめ、全国でパネル展を開催しています。

2 まちづくりネットワーク京都

地域のまちづくり専門家には都市計画や建築設計だけでなく、産業や福祉、さらには子供の教育という幅広い分野にわたる専門的な知識を要求されており、幅広い分野の専門家が有機的に連携して、地域のまちづくりを支援していくことが求められています。これを展望し、センターの派遣コンサルタントを中心に結成された任意団体。

今回の企画を契機として、今後、まちづくりに関する情報交換や学習会を重ね、より広範な職能の専門家とのネットワークの形成を目指しています。



スライド上映会の様子

景観・まちづくりシンポジウム

「都市居住文化を考える」

21世紀のまちづくりフロンティア・京都の秘密

このシンポジウムは、京都が長年にわたり育んできた、職住共存の都市居住文化の継承と発展に様々な分野で取り組んでおられる方々をパネラーにお迎えし、21世紀の新たな価値創造のフロンティアとして期待される京都のまちづくりの源を探ることを目的に、11月23日に開催されました。

コーディネーターのリム ボン氏(立命館大学産業社会学部助教授)による「京町家」VS「新産業、ベンチャー」と「旧住民」VS「新住民」というテーマ設定を受けて、4人のパネラーの方からそれぞれご発言をいただいた後、来場者も加わって熱心に討論されました。

「京町家を通じて継承・発展されてきた日々の暮らしのでき事を大切にする都市居住文化」、「家族との関わりやものづくりへのこだわりを受け止めてくれる京町家と、そういった新住民を暖かく受け入れる西陣というまち」、「『染めのまち』における新しい交流を通じて芽生える地域の活性化の兆し」、「東京や大阪型でない、『知恵に満ちたまち』としての京都の特色を生かした独自のベンチャーの集積」等、パネラーのそれぞれの視点からのお話がされました。

また、来場者からは、「今日の京町家のブームについて」、「都心のま

ちづくりにおけるマンション問題の取組について」、「集客力のあるまちづくりの必要性について」等の質問や意見が出され、「『取って付けた京町家』のうち本物だけが根付いていくプロセスの大切さ」、「新旧住民の交流等によるマンション問題の本質を幅広く共有するまちづくり活動の大切さ」、「自らの暮らしを楽しむまちの魅力が来客をもてなすことにつながるという考え方の大切さ」など、「知恵に満ちたまち」ならではの議論がなされました。

一人ひとりが、自らの暮らしを大切に、人の交わりの中で、洗練させて知恵にしてきたこと、そして、その多様な集積が京都の魅力であり、こうした価値観を共有していくまちづくりの現代的な意義が再確認されたシンポジウムとなりました。



パネラー

- 大野 恭介氏(京都市リサーチパーク(株)企画開発部長)
- 小島富佐江氏(京町家居住者、京町家再生研究会事務局)
- 小針 剛氏(町家倶楽部事務局、写真家)
- 西嶋 直和氏(本能まちづくり委員会委員長、染色補正業)

京町家の保全・再生事例

～ 自分流に暮らす～

フォーカルポイント
「focal point」上京区大宮通元誓願寺下る

今回は前号掲載のギャラリー「Machiya de ほっ」の斜め向かい、昨年11月にオープンした珈琲 & space「focal point」を訪ねてみる。江戸末期に建てられたという織り工場を、人々



優しく迎える暖簾は南さんの奥さんの作品

が集える空間に蘇らせたという。看板がわりの暖簾をくぐり、季節の草花で飾らえた通り庭を奥へと進む。生活の場である表の空間の向こう、もう一枚の暖簾がさりげなく迎える。ガラスの引き戸を開

広々とした空間に談笑の声が心地よく響く。

この豊かな空間を提供するのは、「Machiya de ほっ」オーナー南進一郎さんの実姉である松本千恵子さん。東京のマンション暮らしだが、夫婦とも京都の出身で、いずれは京都に帰りた

いと考えていた。南さんが改修した町家に触れ、それを機会に町家での暮らしを願うようになる。南さんの計らいにより、今の織り工場と出会うことになった。10年ぐらい空き家の状態。中に入るとシロアリの痕跡を発見、油の臭いがツツと鼻につく。「改修する前はものすごい状態だったんですよ。ただど何か惹かれるものがあって。これを見たとき、使いこなせると思ったんです。もしここを借りることができなくても、ここ以外を探すことは考えられない、それぐらい惚れ込んだという。幸運なことに大家さんからは「なるべく長く借りてください」という条件で借り受けることになった。奥の織り工場は従業員の宿舎を兼ねており、水まわりも備わっていた。台所の流しが気に入

り、そのまま使っている。改修は大工さんのアイデアで進めていき、直すところはしっかり直した。毎週進み具合を見に京都に帰るのが楽しみだったという。昨年5月に初めて出会ってから、7月には改修にかかり、11月のオープンを迎える。幸運が重なった。元は専業主婦。「料理が好き、人が好き、飾るのが好き。何かお店ができたらいいなと



思っていた。日本語で焦点を合わせるという店名は、何年も前から温めていました。ここに合

わせてお客さんが集まってくれたらという意味なんです。ゆったり、のんびり。大好きなこの空間を同じように感じてもらえたら。料理に腕を振るい、表と一緒に暮らす娘さんと客をもてなす。自分のめがねに合う雑貨も販売している。「無茶苦茶な暮らし方はしたくないという思いがあります。ですから、自分流におつきあいしながら。お店も、住まいも、生活することも、四六時中ここで過ごす。だから愛しいですね。このまま自分流でやっていけたらいいですね。」

愛すべき町家との出会い、そこでの新たな生活。職住一致の暮らしを自分流に実現する。
OPENは毎月1～20日(日曜祝日を除く)
お問い合わせ / TEL : 075-417-0885

まちづくり交流

「協同組合 京都健康住まい研究会」

京都には優れた技術を持った建設関連の中小企業が多く存在します。今回は、それら建設業界の様々な業種間の交流を図りながら、中小企業の地域との密着性を活かし、時代の変化により多様化するニーズに対応していこうと設立された「協同組合 京都健康住まい研究会」の新しい試みを紹介します。

成熟社会への移行に伴い、建築物に対する価値観は多様化し、ユーザーのニーズに対応できる技術力が求められています。同時に、経済社会構造の変化により、建設業界は大競争時代を迎えており、個々の建設事業者は生き抜くための競争力の強化が急務となっています。中小企業であることから抱かれる経営面や施工面、更には建設に関わる様々な問題への対応力等に対するユーザー側の不安感を払拭できず、優れた技術を生かしきれていない現状にあります。そういった様々な課題を解決し、景気低迷の中で生き残るためにはどうすべきか、京都府建築工業協同組合や京都左官協同組合等、6つの建設業界の組合の協賛と有志建築士事務所の賛同の



会員研修会

もと、大学教授等様々な方々の協力を得、平成10年から約1年間、研究を進めてきました。その結果、企業間相互の情報交流の活発化、「健康住宅」「自然素材」を活かした住まいづくりでの社会貢献、歴史・文化都市及び日本・世界の中の「京都」という視点からの「京都の家づくり」「京都の町づくり」への貢献、業務連携で営業力を強化するためのネットワークづくり等が必要であるとの結論のもと、平成11年8月に結成された組織が「協同組合京都健康住まい研究会」です。

現在、会員は、建築工事、左官工事、屋根工事、電気工事、内装工事等建築施工関連の事業者や建築士事務所等約50社の中小事業者で構成されています。プレーンとして、大学教授や弁護士、税理士、司法書士等、様々な専門職の関わりも得、京都市、宇治市を拠点に様々な活動を展開しています。

具体的取組としては、様々な業種のネットワークを活用し、増改築・新築に伴う施工上の問題だけでなく、相続問題や民事問題等のユーザーの様々な相談に対応していく拠点としての

「ワンストップサービスセンター」の開設、経営状況分析制度や独自の評価基準に基づく経営・技術の優れた業者の選定、施工業者と同研究会の連名で契約を締結することによる工事完成までを保障する制度の制定や、オリジナル性能保証制度の制定等、様々な仕組みについての研究・提案を進めています。更には、健康住まいのあり方や共生循環型建築物の研究等、異業種が情報交流を図りながら「住まいづくり」「住まい方」というハード・ソフト両面の様々な研究を進めています。

今後は、月例会をはじめとする勉強会等により、こういった活動に対する理解者を増やすと同時に、制度や仕組みを確立しつつ、ユーザーへの広報活動を活発にし、更なる新しい「京の家と町」づくりへの貢献を目指して活動を進めます。

中小企業の地域との密着性を活かし、各々の職を確立しつつ相互のネットワークを図り進める新たな試みが、これからの「京の家」・「京のまち」を形づくることはもちろん、コミュニティづくりへと繋がる取組として、今後期待されることです。

お問い合わせ

協同組合 京都健康住まい研究会 事務局
京都市西京区榎原塚ノ本町4番地18
TEL : 075-394-3611
FAX : 075-394-3625



同会リーフレット

まちづくり提案

関西木造住文化研究会

先人の知恵や技の積み重ねにより、現代に受け継がれてきた関西の伝統木造建築ですが、手入れが十分でないものが少なくありません。また、阪神大震災以降、木造建築の安全性に対する不安が指摘されています。

今回は、こうした状況の中、伝統的な木造住文化が現在も都市の中に息づき、各都市のアイデンティティを形成している関西を主な対象に、伝統木造建築を安全で良質な都市文化ストックとして現代に再生する事を目的として活動している「関西木造住文化研究会」を紹介します。

地域固有の気候や風土に適した伝統木造建築は、その洗練されたデザインや木・土・紙などの自然素材の醸し出す落ち着いた雰囲気、有害化学物質のない安全性や環境共生という視点から、その良さが見直されてきており、最近ではこうした建物を新たな住居や事業の場として求める人も増えています。

しかし、そうした建物の中で培われてきた生活文化などについては、今までに様々な研究がされてきましたが、伝統木造に関する耐震性や防火性についての科学的な研究はあまりされてきませんでした。

関西木造住文化研究会では、伝統軸組構法につ

いて、具体的な実験を通して、総合的かつ科学的な研究を行っています。そのモデルケースとして、現在も多くの伝統軸組構法による木造建築が残る西陣地区において、築150年以上にもなるという町家を、所有者の厚意により借り受け、改造を行いました。

この改造の基本理念としては、伝統の住文化を受け継ぎながら、家族三世代が安心して住み続けられる都市型住宅へ、手頃な費用で改造できる手法を提案、実践することが掲げられています。また、大地震においても、一定の損壊はやむを得ないとしても、居住者の生命を守ることを最低条件とし、耐震性、防火性、居住性を向上させること、環境との共生を目指し、エコロジー対策を導入すること、建物単体だけでなく、街区レベルのまちの安全性を高めること、までを視野に入れていきます。

さらには、この建物を使用した、改造前と改造後の振動実験や伝統的な木造土壁の試験体による火災安全性実験等を行い、去る9月30日には、それらの実験結果を踏まえたフォーラムが開催され、土壁の耐震性については現行法令に示されている耐力よりも高い性能を有している、また防火性については木造部材としては現行法令上最も性能が高い準耐火構造

と同等の性能を有している、という結果が報告されました。

さらにこの一連の取組で特筆すべきは、こうした実験だけでなく、同研究会のメンバーが実際にこの改造町家に居住し、まちの一員として生活するという点です。建物の劣化状況や温湿度変化等、改造町家の住性能の経年変化を検証し、他の町家にも適した再生手法を提案してだけでなく、地域の人々との交流の中で、街区レベルでのまちの安全性や豊かな暮らしに向けたまちづくりの具体的な方策の模索・実践を目指しています。

既に、改造町家の一般見学会に先立ち、周辺地域の住民の皆さんへの見学会を行うなど、地域との接点を持ち始めていますが、今後のこうした地域との交流から、研究会の活動が地域のまちづくりと相乗的な効果をもたらすことが期待されます。

お問い合わせ

関西木造住文化研究会
京都市上京区上立売通り浄福寺西入
姥ヶ東西町632
TEL : 075-411-2730
FAX : 075-411-2725

現在研究会では、活動のお手伝いをしていただけるボランティアを募集しています。詳しくは上記まで。



公開見学会の様子



伝統軸組構法による木造土壁の火災安全性実験

ニュービジネスの動向

このコーナーは、新しく立ち上がった、もしくは企画段階にある新発想のビジネスの動向についてのインタビューによる紹介です。

有限会社アクションケイ

取締役 阪部 智子氏

会社の設立経緯と事業内容を教えてください。

女性のサポートを企業コンセプトに、助産婦さんや看護婦さんとの交流の中から、様々な商品開発を行い、販売を展開しています。



もともと電気炉メーカーで

営業をしていましたが、平成7年に限界を感じて退職し、それまでの人脈や営業の経験を活かして、KRPに入居していたパソコンソフト関係の会社を手伝いながら、個人で仕事をしていました。何か女性をサポートできるような、女性の力を結集させた仕事をできないかと思っていた時に、京都の病院の助産婦さん達が考案した、パソコンで看護計画が簡単にできる「看護婦さんのためのパソコンソフト」の開発・販売に携わることになりました。自信を持って全国各地の病院を売り歩きましたが、そこには看護婦さんがパソコンを扱えないという実態がありました。

そこで、平成10年5月、ソフト販売の営業で訪問した京都の看護学校を会場に、看護婦さんを対象にした「パソコン講習会」を始めました。これが反響を呼び、平成10年7月に現在の会社を設立するにいたりしました。

その後、ソフトを考案した助産婦さんとの話の中で、妊娠期から産褥期までを、助産婦さんのネットワークを使い、CD-ROMとインターネット、そしてE-mailでトータルにサポ

ートする「マタニティのためのマルチメディアサポートシステム」を提案しました。これは、平成10年度に通産省関連の助成を受け、試作品を製作しています。現在、女性の一生をトータルにサポートすることを目指し、会員制のホームページを設けています。

さらに、現在の主商品である、沐浴シート「もっくよっく」を開発し、平成11年4月から販売を手掛けています。

これらは、営業活動の際に出会った多くの看護婦さん、助産婦さんとのネットワーク、特にソフト開発に協力いただいた方々との交流の賜物です。その人脈を活かし、商品の考案や販売に反映させています。

沐浴シートとは？

生後1、2ヶ月の赤ちゃんはバイ菌に感染しやすいため、通常ベーパーバスで入浴させます。これを沐浴といいますが、家庭にある洗面化粧台やキッチンシンクを使って沐浴できるようにつくられたのが、沐浴シート「もっくよっく」です。助産婦さん達が沐浴指導をされる中で、核家族化や浴室の形状等、今の日本家庭の事情にはベーパーバスは合っていないと常々思っておられ、洗面化粧台を上手く利用できないかとアイデアを出されたのが始まりで、商品化にいたりしました。腰をかがめずにすむ、たたんでしまえる等、好評で、祖父母の方からの問い合わせも多くあります。



この商品開発は試行錯誤の繰り返しでした。何もなかったところから、いろいろな人の意見を聞きながらやってきたので、当初考えていた用途からは広がりを見せ、モニターやユーザーの声により、使い勝手を考え、改良を加えています。

幸運なことに今年の2月に新聞に取り上げ

られ、日本全国はもとより、海外在住の日本人の方からも問い合わせがあるなど大反響で、ニーズがあることを確信しました。関東地方から九州地方までのデパート等で販売していますが、身近に手に入らないと顧客は増えないので、現在販路を開拓しているところです。

女性起業家として注目されることも多いかと思いますが。

そういった励ましの声をいただくことが多いので、嬉しく思っています。

これまで何気ないアイデアを商品化してきましたが、特に女性は本当にニッチな部分でアイデアを提案されます。もともと女性にも力があると思っていましたが、男性社会では良いところにいると力を発揮できるが、半面マイナスに動くと女性の力を封じ込めてしまうこともある。私は資格や技術は何もないけど、自分の力を発揮するには自分でやるしかないなど、思い切って飛び出しました。社名の「アクション」は英語で「行動」、「ケイ」はドイツ語の「kraft=力」の頭文字です。行動力があります、という意味なんです。

仕事は楽しいし、満足しています。ただ、会社としてやっていくには、自己満足ではいけない、全国にどんどん展開していきたいと思っています。京都ではベンチャー企業が数多く育ってきましたし、京都というブランドがあります。これは一つの武器だと思いますし、今後も京都を拠点に展開していきたいと思っています。

お問い合わせ

有限会社アクションケイ
京都市下京区中堂寺粟田町1
京都市サーチパーク4号館
TEL : 075-315-9006
FAX : 075-325-0044
URL : <http://www.actionk.co.jp>

《センター解説アワー》

コミュニティ・ビジネス

「コミュニティ・ビジネス」とは、住民が主体となり、顔の見える関係の中で営まれる事業のことを言います。

また、地域コミュニティが今まで眠っていた労働力、原材料、ノウハウ、技術などの資源を活かし、地域住民が主体となって自発的に地域課題に取り組み、やがてビジネスとして成立させていく、コミュニティの元気づくりを目的とした事業活動とも言われます。

具体的には、高齢者の増加という地域の課題に対し、福祉関係の専門的な知識をもっている女性が、地域の空き店舗を活用し、地域の女性や退職者など様々な人と力を合わせ、介護や給

食サービスを業務として行うような例がありません。ボランティアと異なり、ビジネスとして有料で行い、働く人も給料を受け取ります。

従来のビジネスとの視点の違いとしては、経済的利益より、地域の人に喜ばれることを重視している点です。

地域の特性に応じ、例の他にも、保育サービス、住宅改善、地域の特産品の製造販売、ホームページの作成や商店街活性化のための地域会社など、様々なものがあります。

そして、その特徴を大きくまとめると以下の4点となります。①地域特性により、千差万別である。②地域の持つ芽や種子を育てる。③住

民の生き方や働き方など生活全般に関する主体性を引き寄せる。④人間性の回復に寄与する。

また、その効果としては、①衰退した地域コミュニティを再生させ、②地域の経済と文化・風土を循環させ、③地域力の維持・発展に寄与し、④自立型の地域社会づくりにつながる、ことが期待されています。

ひと、もの、こと等の豊富な資源を持つ京都において、今後、京都らしい様々なコミュニティ・ビジネスが取り組まれ、京都のまちのコミュニティが一層元気になっていくことが、大いに期待されます。

私と京都



ふたつの都をみて

浜松に生まれ、三ケ日で育った私が、初めて京の都に上ったのは、35年程前、博物館で「ツタンカーメン展」が開かれた時であった。行列の中で小一時間を過ごし、その後は京都観光、バスに乗って市内を回った。三十三間堂、金閣寺を経て、忘れもしないのは、国際会議場。その後、縁があってご指導を受けた大谷幸夫先生の建物で、当時は目新しく、周辺の岩倉の農村景観も記憶に残っている。

その後、東に東京、西に京都という二つの都を行き来してきた。浜松の高校から大学模試を立命館で受け、東京の私大に進学後も、毎年京都には遊びにきた。東京と京都は、東海生まれの私にとって、つまり両端に臨む二つの大都会、憧れの都であった。社会に出てからも、二つの街の異なる姿、人々の考えから多くのことを学んできたと思う。

その後、留学と国連勤務の十余年を経て、落ち着いた街が京都である。もう7年も経つ。外国に暮らしたことなどすっかり忘れ、余所者でありながらも、京都に慣れ親しんでしまった。しかし、東京ではなく京都が好きなのは、私が長年住んだローマに近い街だからでもある。京都の人々も町並みも、実にヨーロッパ的だと思う。反面、東京はアメリカ的。そう、今もこの二都を対比的に見ている。この意味で、日本には都会は、東京と京都しかないとも思う。

(財)京都市景観・まちづくりセンター評議員

宗田 好史

京都府立大学人間環境学部 助教授

パリやローマ等、ヨーロッパの都市が歴史を大切にすることは言うまでもない。しかし、新しいものや余所者を受け入れることもまた上手い。余所者ばかりが集まり、どれだけ早く着いたかを競うニューヨークや東京とは違う。三世代住まない仲間に入れないなどとはいわず、余所者の血を積極的に入れようと努めてもいる。仲間入りの資格は、街への理解度、別の言い方をすれば、京都を大切にしている気持ちだけで、誰をも受け入れる。その意味で京都はエトランゼが住みやすい町でもある。京都は歴史の町だけではない。今の京都を好きな人が集まる街である。

ところで、私は一応、都市計画の研究者でもある。その立場から、これからの日本の都市のあり様は、東京型ではなく京都型にあると考えている。それは、まず暮らしやすさにある。そして近代型の中央集権国家とその産業経済が犠牲にした人間性を、取り戻す道筋が京都には秘められているとも思う。日本はもともと集権的な国ではなく、分権的な国であったという。京都では、日本とが東京を意識せず、この街のことを中心に考える人が多い。自らの暮らしを大切にしている人々の集まる街京都、この肩肘を張らないでいて、しっかりと個性を持ちつづける町。この京都らしさの追求に、新しい生活文化の価値観、ライフ・スタイルの可能性を示しているのだと考えている。

センター語録

センターが設立されてから3年が経過しました。「3日、3月、3年」石の上にも3年」といわれるように、一つの節目を迎えています。人にたとえると、親の愛情をはじめとする周辺環境の影響を受けて、片言の言葉を操りあちこちとめまぐるしく走り回るといふ、可愛い盛りであると同時に目の離せない厄介な時期にあたります。

この間、センターも様々な事業を通じて多くの関係者の方々から温かいご支援や励ましをいただきながら、パートナーシップのまちづくりのイロハを学び、「信頼」というキーワードを発見し、片言ではありますが発言しはじめたところです。しばしば皆様の思いとは違う方向に走り出すことも少なくありませんが、その都度、ご指摘をいただくことができる有り難い状況にあります。

これから2~3年の間に集団生活の中で自立できるよう、より一層の努力が求められています。様々な立場の方々と一緒に一つのことを成し遂げたり、あるときは多に議論をすることを繰り返すことによって、市民のパートナーとして成長していくことができると信じています。

今後も、センター職員の一一人一人が、日々の小さな幸せ、ふとした時に味わう市民の方々との一体感をよりどころにしながら一つ一つのつながりを築いていきたいものです。

(景観・まちづくりセンター事務局 T.T)

センターからのお知らせ

賛助会員の募集 (平成12年度分)

京都のまちづくりに貢献したい！センターの活動を応援したい！そんなあなたの熱意をお待ちしています。

- [特典] ・ニュースレター(年4回・季刊)の送付
- ・ニュースレターでの活動紹介
- ・シンポジウム、セミナー等への優待

[年度会費]

個人1口:5千円 団体1口:5万円

まちづくりフレンズの募集

地域のまちづくりに関する各種イベントや啓発・学習活動にボランティア・スタッフとして参加していただける方を募集・登録しています。

京まち工房 ホームページ

<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/kyoto-ws/>



センターの取組内容をはじめ、まちづくりに関する様々な情報を発信するホームページ。皆さんからのまちづくり情報もお待ちしています。

(財)京都市景観・まちづくりセンター「京まち工房」案内



〒604-0846 京都市中京区両替町通押小路下る金吹町452 (元龍池小学校内1階南側)

しえんさんかひとづくり

TEL 075-212-4031

(支援・参加・人づくり)

FAX 075-212-4047

e-mail: kyoto-ws@mbox.kyoto-inet.or.jp

相談の受付等

月~金(祝日を除く)9:00~17:00

来所される場合はなるべく事前にお電話ください。

なお、駐車場はありませんので地下鉄等をご利用ください。

ニュースレター 京まち工房 第13号 2000年12月

編集・発行 (財)京都市景観・まちづくりセンター

印刷 日本写真印刷株式会社

はあとほお湿布 VOL.13

